

さぎ—サギ—鷺—詐欺—詐欺

鷺(サギ)はコウノトリ目サギ科の水鳥で、長い脚、長い口ばしをもった優雅な鳥だが、その呼び名からくるイメージで、他人の餌を横取りするような害鳥に見られがちで可哀想だ。

私達が憎むべきサギは、詐欺、詐欺のほうだ。昨今一番活動しているのが「振り込め詐欺」だが、警察がやっと重い腰をあげ、取り締まりに力を注いだところから、被害は減少しているようであるが、油断していると次から次ぎえ新手を考え出すから用心が必要だ。

サギ師、ペテン師、イカサマ師と、「師」の字を頂いているところから、先生、指導者、師匠というある特殊能力をそなえた知識階級？であることから、素人さんはコロリと騙されてしまう。



しらさぎ

この憎むべき詐欺行為は、大から小まで実に膨大な数がこの世には氾濫している。詐欺は新しいものではなく古くからあった。しかし情報、通信の発達・普及から増大の途を辿り、考え方によっては、まさにだましの社会に善良なる庶民が飲み込まれた感じがするが如何だろうか。

「人を見たら泥棒と思え」の教えを復活し、まず性悪説から始まり、悲しいことではあるが、信頼とか信用の言葉は死語として棚上げしておいた方がよさそうである。

「俺のかみさんは、結婚前にはすごい美人だった。結婚後お化粧カベを落としてスッピンになったら下から鬼瓦が現れたよ、これサギだ！」と力んでも、かみさんは詐欺罪にはならない。逆に「私の夫は、結婚前チョウ強そうに見え、ルンルン気分で結婚した。なのにすぐにふにゃふにゃの軟体動物であることが分かった、これってサギジャンカ！」って怒っても、詐欺罪にはならない。なぜならこんなことは日常茶飯事でどこにもある話で、勝手にあんたが思い違いしたのじゃないの。と笑われて終わり。

笑ってすむサギはいいが、詐欺罪には笑えない深刻な損害を与えてしまう悪質なサギがある。人の弱みに付け込んだ、人の無知なるに付け込んだ悪質なサギは糾弾されなければならないし、駆逐されなければならない。

高齢者の思慮の脆弱さに付け込んだ詐欺行為は今後増大することが考えられ、私たちはスクラムを組んでこれらの悪に対処しなければならない。サギの手口を逐次情報発信し消費者の横のつながりを強化し、付け入る隙を無くす様にしなければならない。

医者に見離されたガン患者が、藁にもすがりたい気持ちに付け込み、なんでもないキノコの粉末を、高貴薬に仕立て上げ利益をむさぼる。高齢者のみの家庭を訪問し縁の下にもぐりこみ、「シロアリが発生する兆候があります、すぐに消毒をして換気扇をつけないと家が倒れてしまいますよ」と脅かして高額な工事費を請求する。

かとおもえば、廃鶏を集めて味付けを行い、高級地鶏

料理といって客に出す。(廃鶏とは、卵を産まなくなった婆さん鶏で、タダ同然で仕入れたもの)

中国産の鰻を中国で加工しカバヤキにして、日本に持ち帰り、国産のレッテルを貼って販売する。

格下の牛肉を高級ブランド飛騨牛と偽り差額を搾取する。消費期限を過ぎた食品を回収して、レッテルを作り直して再販する。数えだしたら切りがない。特に人の口に入るものの詐欺行為は、失敗とか間違いとかではなく、はっきりと悪事を認識してやっている限り酌量の余地はなく、二度と事業に復帰してほしくないものだ。消費者はこれらの企業の製品は二度と買わないようにしようではないか。

永遠のインチキ薬品、毛生えぐすり。男性の願望である「ハゲにはなりたくない」の思いがある限り、このインチキ商売は未来永劫手を替え品を変え繁盛する。

利用する男性も薬効を信頼しているのではなく、もしかしたら少しでも効くかもしれないの一縷の望みで高額を投資する。投資だから損もあると覚悟はしているのだろうが、哀れなかな男心よである。やかん頭から湯気を立て「なんでこのインチキ野郎！全然効かねえぞっ、金返せ！」とどなっても、うさんくさい男が出てきて、すまし顔で「はい、残念ながら 3%の方には発毛を実感していただけます」とやる。効かない人がどれだけあろうと、分母が分からないから貴方は 3%の中に入ってますと。(もちろんこのインチキ話しは特定な薬品を指してのものではありません)

話しは余談になるが、私の親父は 50 歳後半からみごとな？ハゲになり、私たち子供はハゲチャピンとってからかったものだ。ハゲチャピンという語調がなんとなく愉快で可愛げがあり、本人も嫌な様子は無かった。親父は自分のハゲが自慢で、卵の白身で磨くまではやらなかったが、光頭族の美学を語っていた。「男の勲章だ」「汚らしい白髪に比べ、輝きは人に好感を抱かせる」「洗うにも手間がかからず、第一にシラミも湧かず清潔だ」「ハゲに悪人は居ない」「ハゲは癌に罹らない」等々。あとの二つの信憑性は分からぬが、子供たちは反対することもないから、ニヤニヤしながら聞いていたものだ。私はまだ髪が少々残っているから、当然不潔で、人を嫌な気分させ、人が悪く、多分癌になるだろうと思っている。

そんな親父が亡くなった時、勤め先に「直ぐ帰れ」の連絡が入り、飛んで帰ったが間に合わず、私は両の手で親父のハゲチャピンを抱え、声には出さなかったが「親父、これまでよく頑張ったな、おつかれさん」と言ってやった。その時の親父のハゲチャピンの最後に残されたわずかなぬくもりが、私の両方の手のひらに、確実に伝わってきた。そして今もはっきりと両手に残っている。

ハゲチャピンでよかった。